

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370183

研究課題名(和文) 戦前ドイツの前衛芸術研究 - - ハンナ・ヘーヒを中心に

研究課題名(英文) A Study on the Avant-garde Art in prewar Germany: Focusing on Hannah Hoehc

研究代表者

香川 檀 (KAGAWA, Mayumi)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：10386352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、2016年で誕生百周年を迎えた前衛芸術運動ダダについて、とくにベルリン・ダダのメンバーであった美術家ハンナ・ヘーヒに焦点をあてて再評価を試みたものである。ヘーヒその他のダダイスト、および交流のあった前衛芸術家の作品や資料を調査することで、「反芸術」や破壊といった否定的な側面が強調されてきたダダイズム運動のなかで、ヘーヒをはじめとするダダイストの独創的な創作が、今日の現代芸術に果たした影響力という点で、きわめて重要な意義をもつものであることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at reevaluating the avant-garde movement Dada, which celebrates the 100th anniversary in 2016, with special reference to Hannah Hoehc, a female member of Berlin Dada. By investigating the artworks and materials of Hoehc and other artists, it was made clear that, although Berlin Dada is generally regarded as radical and destructive anti-art movement, Hoehc and other Dadaists created very unique artworks which can be considered as significant and far-sighted in terms of the influence on the contemporary art practices.

研究分野：表象文化論、20世紀美術史、ジェンダー表象論

キーワード：表象文化論 美術史 ジェンダー論 前衛芸術 写真 ダダイズム ドイツ視覚文化 人形

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内外の研究動向

ダダの再検証：ヨーロッパのダダイズムは、第一次大戦下にスイスのチューリヒとアメリカのニューヨークに起こった前衛芸術であり、従来は価値破壊的な「反芸術」の運動と見なされ、後続するシュルレアリスムや構成主義に至る過渡的な現象と位置づけられがちであった。しかし、2016年にダダ誕生から100周年を迎えるのを機に、この運動が現代芸術に与えた影響を再評価する研究が近年、欧米で次々と公表されている。1990年代にチューリヒ・クストハウスで開催された展覧会「*Dada global*」(1994)が、ダダを国際的ネットワークで結ばれた「芸術のグローバル化」として描きだし、2000年代に入っては Rudolf Kuenzli の著書 *Dada*(2006) やワシントン国立美術館のダダ展「*Dada: Zurich, Hannover, Cologne, New York, Paris*」(2006)が、現代芸術・文化論を踏まえて、これまで見過ごされていたダダの創造的意義を多角的に検証している。

ハンナ・ヘーヒ研究：ハンナ・ヘーヒ (Hannah Höch 1889~1978) は、ベルリン・ダダの理論的指導者ラウル・ハウスマンとのパートナーシップをつうじてダダの思想的側面を共有した存在として、その実践である作品とともに80年代以降とくに注目を集めてきた作家である。彼女の制作したフォトモンタージュと出版マスメディア文化との深い関わりに焦点をあてたアメリカの研究書 Maud Lavin, *Cut with the Kitchen Knife*(1993)や、ドイツで2011年に刊行された初の浩瀚な伝記、Cara Schweitzer, *Schrankenlose Freiheit für Hannah Höch* などにより、ヘーヒのダダ以後のオランダ構成主義者やバウハウスとの交流など、1920年代ヨーロッパにおける前衛との接触があきらかにされている。

国内の研究状況：日本におけるダダの造形

芸術研究は、フランスを中心にマルセル・デュシャンや「前シュルレアリスム段階」でのマックス・エルンストに限定される傾向がある。ドイツのダダについては、平井正『ダダ/ナチ』(全3巻、1993-94)を初めとし、シュヴィッターズに焦点をあてた河本真理『切断の時代』(2007)、およびダダの身体表現を論じた香川檀『ダダの性と身体』(1998)、第一次対戦と美術の関係を論じるなかでダダに言及した河本真理『葛藤する形態』(2011)などが見られるが、まだ本格的なドイツ・ダダイズムの美術研究書は編まれていない。

(2) これまでの研究成果と着想の経緯

ダダイズム研究：申請者は1990年代初頭よりドイツのダダイズムと、その女性メンバーに関する資料調査を行ない、ハンナ・ヘーヒについては1989年の生誕100年展(ベルリン)をはじめ、91年には遺族のもとを訪問して遺作や遺品を調査し、ドイツのダダに関する著書『ダダの性と身体 グロス・エルンスト・ヘーヒ』(ブリュッケ、1998年)にまとめた。

表現技法の分析

上記『ダダの性と身体』を上梓して以降は、ダダの総論というよりも、各論としてヘーヒやシュヴィッターズなど個別作家の表現技法について3本の論文を執筆し、共著書や論集に発表した。人形論「アレゴリー的身体

人形装置と 聖なる憂い」、小林康夫・松浦寿輝編『表象のディスクール 3(身体)』東大出版会、2000/フォトモンタージュ論「テクノロジーと<新しい女>の相互浸透」、田丸理砂・香川檀編『ベルリンのモダンガール』三修社、2004/コレクション論「蒐集アートの一起源として見たコラージュ/モンタージュ ハンナ・ヘーヒ《わたしの家訓》」(『武蔵大学人文学会雑誌』第38巻1号、2006)。これら個別の作品研究から、もう一

度、最近の海外におけるダダ研究の知見と新たに発見された作品などを採り入れ、視野を広げたダダ論に着手する必要性を感じた。

2. 研究の目的

(1) 概要

本研究は、戦前 1910~1920 年代のドイツにおける前衛美術、とくにダダイズムの造形実験について、ベルリン・ダダのメンバーであったハンナ・ヘーヒに焦点をあてて調査を行うものである。ダダを現代芸術の源泉として再評価する近年の海外の研究を踏まえつつ、「メディア美学」「移動と越境」「ジェンダー」の点で重要な意味をもつヘーヒについて、彼女のダダ以後の展開もふくめ体系的に調査する。日本におけるダダイズム再考のための基盤的な研究を目指すとともに、ヘーヒに関する本格的モノグラフを著すことを最終的な目標とする。

以上の目的のために、ダダ期においてヘーヒとハウスマンが模索した造形実験と、ダダ以後のヘーヒ独自の展開を、とくにメディア論、作家たちの移動による「地政学」、そしてジェンダー論の視点から詳しく検証する。これにより、日本におけるダダイズム研究と 1920 年代を中心とした前衛研究の欠落を補うものである。

(2) 具体的な研究構想

本申請は平成 25-27 年度の 3 年間で科研費交付の対象期間とし、期間内に予定していた研究の構想は次の 3 点から成る。

ダダイズム運動全般にわたる最新の研究動向の、体系的な調査：近年のダダ再評価の内容を把握し整理する。ダダの思想的基盤を再考察するとともに、彼らがキャバレーの演目として行なった舞踊やパフォーマンス、人形劇、写真や映画などについての新知見を吟味する。また、1910~30 年代の美術家たちの国際的な移動と交流による影響関係をあきらかにする。

ハンナ・ヘーヒ研究：近年、相次いで刊行されているヘーヒの作品論や伝記を研究する。申請者がこれまで収集した遺品・資料をあわせ、近年ようやく全貌が公開されたベルリンの州立現代美術館（ベルリン・ギャラリー）アーカイヴのヘーヒに関する資料を調査する。それによって、ダダの思想と実践を促した人間関係や、当時のダダ運動内部の事実関係をあきらかにし、前衛芸術運動に関わった女性芸術家の問題というジェンダー研究につなげる。

表現技法の分析：とくにダダのフォトモンタージュやアサンブラージュ、イメージ・コレクション（アルバム/アトラス形式）、人体オブジェ（人形）、写真とフォトグラムなどの技法や作品ジャンルに焦点をあて、この時期の前衛の実験が 20 世紀美術にもつ意義を再考する。

(3) 予想される結果と意義

ワイマール期を中心とした 1910~30 年代ドイツの前衛美術については、パウハウスや構成主義、あるいは表現主義などの研究が日本では主流であり、ダダを基軸にした戦前ドイツ美術研究はほとんど行われていない。その意味で、ダダ研究の遅滞をリカヴァーする意義をもっている。とくに、1920 年代のベルリンというモダニズム都市におけるヘーヒのフォトモンタージュは、メディア論として、またジェンダー論として独創的な価値をおびている。

本研究は、まもなくダダ誕生 100 年を迎えるなかで、ダダ再評価と現代美術の系譜の再考に先鞭をつける研究といえる。近年、公開されたヘーヒの遺品アーカイヴを調査することによって、運動や交流の事実関係があきらかにされ、我が国における戦前ヨーロッパ前衛研究ひいては戦後の芸術研究に、大きな資料的・理論的な貢献をするものと考えられる。

3. 研究の方法

ダダを中心とする戦前ドイツの前衛芸術に関する総論的な研究と、ハンナ・ヘーヒ個人の作家論を軸に据えたベルリン・ダダをめぐる個別研究とを、有機的に組み合わせていく。また、日本国内でも戦前の前衛に関する展覧会や、表現手法の点で関連するジャンル（写真、フォトモンタージュ、人形など）の展覧会があれば、これを視察調査に行く。

(1) 戦前ドイツの前衛運動とダダに関する資料収集と作品研究。ダダ再考のための焦点を絞りこむために、ダダとその周辺の前衛に関する総論的な資料収集と作品研究に重点をおく。申請者が2012年3月まで客員研究員として在籍していたベルリン・フンボルト大学の図書館をはじめ、プロイセン文化財団の美術図書館などを調査する。チューリヒの美術館クストハレによる展覧会カタログ“Dada global”(1994)や、ワシントン国立美術館による展覧会カタログ“Dada: Zurich, Hannover, Cologne, New York, Paris”(2007)が当面もっとも参考となる手がかりであるが、ヨーロッパにおける現地調査を実施することで、地域別、表現ジャンル別の詳細な調査をめざす。これまで散発的にしか行うことのできなかつた資料調査と作品研究を集中的に行なうことによって、国際的な拡がりをもったダダ運動の概要を把握するとともに、近年の新たな発見や、研究の動向なども確認する。

(2) ハンナ・ヘーヒのアーカイヴ調査。ヘーヒは、自身の作品とともに、ダダやその他の前衛芸術に関するドキュメントを大量に保管しており、死後、すべてをベルリン市に寄贈した。その大部分を保有しているのが、ベルリンの州立現代美術館（ベルリン・ギャラリー）である。ここの「アーティスト・アーカイヴ」では、2001年に、遺品として寄贈

された手紙、ダダの宣言文や機関誌原稿、日記、その他のドキュメントを3巻本の『ハンナ・ヘーヒ 人生コラージュ』(Hannah Höch --eine Lebenscollage)として出版している。申請者は、すでに90年代初頭、ここのアーカイヴと作品保存庫を訪れ、資料の存在を確認している。しかし、このときヘーヒの遺志により非公開とされていた資料が、2000年代後半に入ってようやく公開され、出版されていない大量のドキュメントを閲覧できるようになった。

(3) ドイツをはじめとする海外の研究者との交流。戦前ドイツの前衛芸術についての研究者は多くいるが、とくに身体表現、写真、フォトモンタージュ、パフォーマンスといったダダの表現技法に関する研究や、前衛運動とジェンダーに関する批評的仕事を行なっている研究者とコンタクトを図る。

(4) 調査の総括・研究成果の公開と、日本の美術界に向けた情報発信。本研究は、日本とドイツ、そして英米の前衛美術（とくにダダ）研究ならびにジェンダー研究の交流や研究成果の共有が期待される。そのために、申請者が所属する「イメージ&ジェンダー研究会」や「表象文化論学会」「美学会」「日本ドイツ学会」などで随時、成果を発表していく。

4. 研究成果

(1) 主な成果

ダダとヘーヒに関する新知見：ベルリン・ダダの活動の詳細、およびヘーヒのそれへの関与の実態を資料から検証することができた。とくに、ヘーヒのフォトモンタージュや人形作品について、成立事情や作品解釈についてのドイツにおける諸研究を調査できた。さらに、20年代のヘーヒの絵画作品について、制作・展示活動の状況が明らかになった。これにより、ダダ運動における絵画実験の「ダダ以後」における展開や、シュルレアリスム

運動との関わりについても有益な知見が得られた。ヘーヒ 30 年代の作品として近年注目を集めている写真集《アルバム》についても現物を実見し刊行された資料の誤りなどを確認でき、訂正版に基づいた研究が可能になった。これらについては、雑誌および図書への寄稿論文で成果を発表したほか、国際学会でも発表を予定している。

資料収集と研究交流：ダダに関して、米国アイオワ大学のダダ・アーカイヴ&研究センターの叢書をはじめ、博士論文を多数収集した。また、2000 年以降ドイツで精力的に出版されているダダやハンナ・ヘーヒの文献を収集し、ダダとジェンダーに関する研究の蓄積も追跡することができた。資料収集で助力を得たベルリン州立近現代美術館（ベルリニッシュ・ギャラリー）の学芸員とは今後も交流を図ることになっている。また、元ボッフム大学教授で現在ブラウンシュヴァイク芸術大学教授のカタリーナ・ズコラ氏と知己を得、19～20 世紀の視覚芸術とジェンダーについて、今後も研究交流をはかる予定であり、2016 年 8 月には、マンハイム美術館で開催中のハンナ・ヘーヒ展を機に、ドイツを代表するハンナ・ヘーヒ研究者を数名、紹介いただくことになっている。

研究会 / 公開講座 / 論文刊行

ヘーヒのコラージュ技法と比較するうえで重要な日本の作家、桂ゆきについて、イメージ&ジェンダー研究会を開催し、議論を行なった。また、申請者の本務校である武蔵大学の公開講座にて講師を務め、ダダをはじめとする前衛芸術運動における人形のモチーフについて講演した。さらに、ダダのような前衛芸術がはらむ破壊性や暴力性をジェンダーの視点から考察する講演を、国立新美術館で行なった。戦前の前衛芸術であるダダと、戦後アートとを結ぶ論考を、雑誌や美術館紀要などに発表した。

(2) 研究成果の国内外における意義

戦間期ドイツの視覚芸術に関する研究は、日本ではパウハウス関係もしくはマックス・エルンストやクルト・シュヴィッターズといった個人作家の研究に限定され、国際的なダダ運動の一環であるベルリン・ダダについて本格的な研究がなされていない。2016 年にダダ誕生百周年を迎えた現在、ダダ再考の研究を発表する意義はしたがって大きい。一方、ドイツでは、日本版画の研究者であったベルリン工芸美術館の付属学校教授エミール・オリークの生徒であったベルリン・ダダのメンバーが日本文化に大きな関心を寄せていたことが知られ、いま日本の研究者がベルリン・ダダとハンナ・ヘーヒに異文化の目から光を当てることに期待が寄せられている。

(3) 今後の展望

ベルリン・ダダとハンナ・ヘーヒに関する研究を総括し、戦後アートへの展開と次世代による継承についても調査を継続し、来年度には図書として発表したい。併せて、ヘーヒの作品を所蔵する国内美術館の学芸員と連繋して、ヘーヒとダダに関する公開講演会などを企画したい。また、前衛とジェンダーに関するドイツの研究者を日本に招聘し、講演会を行うつもりである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

1. 香川檀、「アートにみる女性作家の暴力表現」、『国立新美術館 研究紀要』、査読無、第3号、2016年7月(印刷中)
2. 香川檀、「即物的アルバムと魔術的ヴァニタス ハンナ・ヘーヒ、ポスト・ダダ のイメージ思考」、『ユリイカ 特集:ダダ・シュルレアリスムの21世紀』(青土社)、査読無、臨時増刊号、2016年6月(印刷中)
3. 香川檀、「戦後アートにみる女性の暴力表現 ニキ・ド・サンファルとレベッカ・ホルン」、『美術運動史研究会ニュース』、査読

無、第150号、2015年、8-14

4. 香川檀「罪の刻字、死の接吻 レベッカ・ホルンの処刑機械」、『Yaso(夜想)特集:カフカの読みかた』(ステュディオ・パラボリカ)、査読無、不定期刊行物、2014年、82-93
5. 香川檀「写真スクラップのイメージ思考 ハンナ・ヘーヒ(アルバム)をめぐる」、『武蔵大学人文学会雑誌』、査読無、第45巻第3・4号、2014年、33-56

【学会発表】(計4件)

1. 香川檀(Mayumi Kagawa)、"photo-graphic scrapbooks and image-thinking: On Hannah Höch's "Album", 第20回国際美学学会(20th International Congress of Aesthetics) 2016年7月28日(発表確定)、ソウル(韓国)
2. 香川檀、「ハンナ・ヘーヒにみる知覚のイメージ思考」、国際シンポジウム「アヴァンギャルドの知覚」[科研費基盤研究(B)「西欧アヴァンギャルド芸術における知覚のパラダイムと文化表象システムに関する総合的研究」、研究代表者:山口裕之(東京外国語大学)]、2016年7月25日、東京外国語大学(東京都・府中市)(発表確定)
3. 香川檀、「戦後アートにみる女性の暴力表現」、国際シンポジウム「戦後美術史における女性作家の活動」(国立新美術館ニキ・ド・サンファル展関連シンポジウム)、2015年9月19日、国立新美術館(東京都・港区)
4. 香川檀、「人形愛としての西洋美術 古代彫刻から関節球体人形まで」、武蔵大学第61回公開講座「文学と美術からみる人形文化」、2014年10月4日、武蔵大学(東京都・練馬区)(全4回中の初回)

【図書】(計2件)

1. 香川檀(編著)踊共二、嶋内博愛、小山ブリジット、光野正幸、木元豊、桂元嗣、小森謙一郎、平野千果子(共著)、水声社、『人形の文化史 ヨーロッパの諸相から』、2016年、340頁(まえがき11-19頁、第8章282-322頁)
2. 尾関幸編、香川檀、杉本俊多、大原まゆみ、岡本和子、初見基、海老澤模奈人、中島裕昭、星野宏美、池田祐子、囿府寺司、ベアテ・ミルシュ、長野順子、三輪玲子、都築千恵子、田中正之、北村昌史、渋谷哲也(共著)、竹林舎、『ベルリン 砂上のメトロポール』(佐藤直樹ほか監修「西洋近代の都市と芸術」(全8巻)第5巻、2015年、478頁(384-406頁))

6. 研究組織

- (1)研究代表者
香川 檀(KAGAWA, Mayumi)
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号:10386352